

近年の保育研究における 用語「育ち」の増加傾向とその意義

竹内 順子

(十文字学園女子短期大学)

1. はじめに

近年、保育の現場や保育研究のなかで「育ち」という用語によく出会う。この類語に「発達」ということばがあるが、いまから3年前、幼稚園の保育者にこの語のイメージについてたずねたところ、現場ではむしろ「育ち」のほうがしっくりくる、とのことだった。広辞苑によると、「育ち」とは「①そだつこと。成長。生育。②そだちがら。そだちかた。『氏よりー』」とある。しかし、最近保育界で頻用される「育ち」という語には、保育観の変化に応じて特別なニュアンスが込められているように思われる。本論では、「育ち」ということばを手がかりにして、現在の保育研究の動向と可能性についてさぐっていくこととする。

1. 近年の保育研究にみる「育ち」の語

1. 出版図書にみる「育ち」

(1) 題目中の登場数の増加

最近の保育分野における「育ち」の語の使用頻度の増加をみるために、和図書のタイトルに使われている「育ち」の語をデータベース検索した。⁽¹⁾ そのうち、上記の広辞苑による語義の②にあたるものと、「都育ち」などの場所柄やそれに類するものを付したもの、人間以外の生物に関するもの、そして名詞形でないものは除外して、算定した。⁽²⁾ (1)は筆者が別個に見出した文献を加算)。84年以前の図書としては、1981年に1⁽²⁾、1949年に1⁽³⁾、1948年に1⁽⁴⁾、1894年に1⁽⁵⁾が検索された。ここで算定された図書はすべて、結果的に保育関係の文献であった。1989年以降、「育ち」をタイトルにもつ図書の出版数が目立って増加していることがわかる。

(2) 「育ち」を使う保育文献の内容的傾向

たとえば村石京の『子どもたちの育ちをみつめて』(1991)⁽⁶⁾は著者の豊富な保育の実践体験にもとづいて、「基準としての発達観とは別の発達観」が必要だと論じる。辻井正は『共に育つ「障害児」の育ちと保

育』(1989)⁽⁷⁾で、子どもの遅れを数量化せずに、遅れを理解する発想の大切さを主張している。保育のただなかで起こっていることに自らもかかわりあい、感じ合いつつ、子どもを理解しようとする共通した姿勢が、他の多くの文献も含めて認められる。

2. 本学会研究発表・シンポジウムにみる「育ち」

(1) 題目中に「育ち」の登場する回数の急増

過去の本学会における研究発表、シンポジウム(企画、自主共)のタイトルに「育ち」の語が登場する回数は表の通りである。ここには「育ちあい」(2)、⁽⁸⁾「育ちあがり」(1)⁽⁹⁾という複合的用語も含まれている。また、同一研究者による2ヵ年の継続研究が4本、4ヵ年のものが1本各年算入されている。題目中になくても、論文の文中に「育ち」の語が頻繁に使われているケースも多い。しかし題目に限定しても、1989年以降「育ち」の語が徐々に保育研究者のあいだで多く使用されるようになっており、これは先に見た出版図書での傾向と、軌を全く一にしているといってもよいだろう。第一回保育学会の1947年以降1985年にいたる38年間、「育ち」の語は題目中に1回も登場していない。このことから最近の「育ち」の語が、保育の現場や研究においてまさに現代的な要請として使用されていることに注意しなければなるまい。

(2) 「育ち」の語の使用される文脈的特質の検討

①主体の汎用性 「～の育ち」の～部分、つまり育つ主体に注意すると、子ども、母親、社会性、M子・E子・Y男、幼児、3歳児、学生、感性、保育者などとなっている。子どもに限らず、保育者・学生なども「育ち」の主体となり、またM子といった固有名詞の具体的な子どもについても「育ち」は語られる。人間に限らず、社会性や感性などの抽象的な名詞についても汎用性がみられる。

②相互性 「家庭と園と養成校の連携(2)―家庭と幼稚園との連携によるT児と保育者の育ちをめぐる―」(岩田美穂子、清水陽子、松隈玲子 1995)や、「保育者としての育ちを考える」(自主シンポ 1990)などに、本来育てる者であった側が育てられる(育つ)側にもなるという視点がうかがえる。「育ち合い」という用語も一方に見られるが、大人をも無理なく主語にしうる「育ち」が、子どもと大人の相互的な

成長を表現するのに適した用語として採用されているのだろう。

③自発性 中新晴江は「M男の内なる力『育ち』への可能性」として、「育ち」が子どもの力の「表出・発揮」であることを強調する（「幼児理解がもたらす『育ち』へのアプローチ」1993）。また、重森澄江らは「保育者と子どもと子どもの共感、感動こそが豊かな感性の芽を育てていく」と表現活動における感性の「育ち」について論じている（1995）。子どもの内面から発する成長・変化について「育ち」が語られ、客観的で数量化しやすい能力的発達とは一線を画して用いられている。

④環境の重視 竹井史らは草木染による幼児の感性の「育ち」についての研究で、「身近な環境に親しみ、自然とのふれあいや遊びを通じた実体験の継続的な積みあげの重要性を主張」する（1994）。清水陽子らは「入園後のT児の変容と育ちを継続して観察することで、子どもの育ちと母親の保育力を高めるための望ましい保育者の援助と幼稚園の役割について」論じている（前出）。「育ち」が主体の自発性そのものの尊重であることから必然的に、このような自然や保育者・幼稚園などを「環境」、つまり育つ者の自発性を支える関係において重視することになると考えられる。

⑤「発達」との距離（全体性） 「幼児の識字能力の発達と育ちのバランス」（中野由美子 1992）という題目には「育ち」と「発達」という2つのことばが並行して使われているが、似て非なる両語の関係を明らかにするためのヒントになる。内容文を参照してみると「発達」は、幼児の識字能力という客観的に観察できる部分的、かつ数量化可能な特質に注目している。これに対して「育ち」の語は文中使われていないが、「全体的な発達」という表現が題目の「育ち」にあたるものと読みとれる。ここに各能力への「分化」というベクトルをもつ「発達」という語と、部分の総和やバランスとして「全体性」に向かう「育ち」ということばとのコントラストが明確になる。また同時に、心理学的な論文の結論として、「部分」の「総和」としての「全体的な発達」は引きだされても、それが文中で「育ち」に書換えられなかった点に、「育ち」のもつ単なる「総和」以上の語感・語義が暗示されていると見てもよさそう。

III. 「育ち」の語の普及の背景

1. 幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂

1989年、1990年と「要領」と「指針」がそれぞれ改

訂された（文中に「育ち」は使われていない）。時期が丁度「育ち」の語の急増と重なるが、これは改訂によって「育ち」への意識がたかまったというよりもむしろ、改訂を結果として導いた、保育者や保育研究者の子ども観・保育観の変化が、「育ち」という語の多用という形で象徴的に現れたと見るべきであろう。

2. 「発達」に替わる保育学的用語の模索

冒頭の保育者のことばにあるように、「発達」という語が保育現場でかならずしも「しっくりこない」という面があるとすれば、心理学的な発想のつよい従来の「発達」という語に替わる、保育学的な用語が待たれていたのではなかろうか。「保育学的」とは、保育の日常的な生活世界を第一に尊重し、子どもの個としての成長を願いながら、保育者がみずからも主体としてかわり、今というプロセスを共生するあり方を基本にしている。保育学的発達観というものがあるとすれば、子どもを対象化し各能力の数量的な評価をもとに子どもの成長モデルを抽象する心理学的な発達観とはそぐわない面もあることは当然であろう。このギャップを埋める形で「育ち」の語が採用されるようになったのである。⁽⁸⁾

「育ち」は「巣立ち」を語源としているといわれるが、「育つ」という和語自動詞の名詞形である。和語のもつやわらかい印象、文化的色彩の濃さは、保育行為の特質に合致している。「育ち」の他、「気づき」、「支え」、「働きかけ」⁽⁹⁾などの和語も、近年の保育研究でよく見かける和語の用語である。和語は従来、日本の近代以降の学問において低い位置に甘んじてきたが、保育学の学問的特質をかんがみると、和語的語彙を思慮深く自覚的に採用していくことに意義がみとめられるべきであると思われる。

註：(1) 文部省学術情報センターの「目録所在情報データベース（和図書）」とJPMARCを利用した。(2) 河添邦俊「幼児期の育ちと中学生の心と身体の発達」ひかり書房 (3) 名古屋大学小児科学教室編『からだの育ち：百万人の育児法』保健社会協会 (4) 村田直樹『心の育ち』保健社会協会 (5) 依田文四郎『躰と育：婦女心得』温故堂 (6) フレーベル館 (7) ひかりのくに (8) 竹内順子「発達への問いと保育」、「別冊発達14 新・保育入門』ミネルヴァ書房(1993)で「育ち」と「発達」の用語的特質の比較を試みた。(9) 下山田裕彦は保育のなかで「指導という言葉は強すぎる」として「働きかけ」という表現を提案している（本学会自主シンポジウム、1989）。